



冬場の防寒について

牛舎内の保温を気にしすぎるあまり、有害なガス（アンモニアガス等）が充満し、呼吸器病を引き起こす危険があります。夜間は保温するために南面もある程度閉め切ることがあっても、日中は極力開放し換気にも充分気を配りましょう。これは夏場も同じことが言えます。私たちは立って歩くので、臭いに気づかないことがあります。牛の顔の位置で温度や換気状態を確認することが大切です。牛は寝ていることが多いので、実際にしゃがんでみることです。また、冬場は気温が低だけでなく空気が乾燥しています。空気が乾くと、おのずと喉が乾き、本来持っている防御機能が低下し、細菌やウィルスなどの病原体が体内に侵入・増殖しやすくなります。そして風邪などの疾病に罹りやすくなるわけです。ウィルスなどは低温で、しかも乾燥した環境が最も生息しやすいからです。さらに排泄物によるアンモニアガスなどの発生が加わり、喉だけでなく、



畜産

太田 拓真
上島営農指導センター
080-1729-9237

目や鼻の粘膜にも炎症を起こしやすくなります。閉め切った牛舎内に呼吸器病を発生している牛が同居していると、飛沫感染などによって、あっという間に病原体が牛舎内に広まり、次々に抵抗力の弱い子牛などへ集団的に感染していきます。空中のほこりもその伝染を助けますので、換気して新鮮な空気の入れ換えが必要です。ふん尿処理・牛床の敷料交換はこまめに行い、アンモニアガスの発生を防ぐことが大切です。

日常の作業の際、牛の様子をよく観察し、少しの変化も見逃さないことが、疾病の早期発見・早期治療につながります。また、それ以上に日頃から病気をしないために予防が一番大切なことです。これから寒くなりますがこまめに観察・予防をお願いいたします。

営情



12月の柑橘園管理

本年は全体的に着色もやや早く、主役のデコボンでは肥大も平年に近づいております。年明けから中晩柑類の本格的な収穫が始まりますので、体調には十分注意をされて最後の仕上げ管理に努めて下さい。

1. 病虫害防除

対象病虫害	農薬名	希釈倍数	収穫前日数		備考
			温州	中晩柑	
貯蔵病害	ベフラン液剤25	2,000倍	前日		1回目
	ベンレート水和剤	4,000倍	前日		
	ベフトップジンフロアブル	1,500倍	7日前	前日	3回目
ハダニ（発生時）	オマイト水和剤	750倍	14日前		完全着色時 気温22度以下 温州みかん対象 下旬～1月中旬
越冬害虫	マシン油乳剤 95%	40倍			

2. へた落ち対策

収穫から長期間貯蔵を行う甘夏などでは、へた落ち防止の為散布を行って下さい。

対象品種	農薬名	希釈倍数	収穫前日数
甘夏・伊予柑 八朔	マデックEW	2,000倍	20日前まで

3. 水腐れ対策

11月の柑橘園管理でも紹介しましたが、本年産の



果樹

後藤 昇
下島営農指導センター
080-1729-1631

デコボンやボンカンでは果皮の体質が弱く水腐れのリスクが高いです。ジベレリンを散布されていない園では早急に散布を行い、対策を行きましょう。

○ジベレリン液剤40mlの場合

対象品種	使用濃度	1ビン当たりの水量	実施時期	収穫前日数
ボンカン	0.5ppm	400ℓ	着色始期～4分着色期	21日前まで
デコボン	1ppm	200ℓ	着色終期	7日前まで

4. 樹勢回復対策

収穫が終わった品種ではまず十分にかん水を行い、その後チッ素主体の葉面散布で樹勢回復を行いましょ

	資材名	希釈倍数 又は袋数	備考
葉面散布	尿素・アミダージュN14	500倍	いずれかを3回程度
	又は神協スピリッツ	500～1,000倍	集中散布しましょう。
施肥	ハイヤ1号	2袋/10a	温州みかん対象

花卉



ヨトウムシ類の見分け方



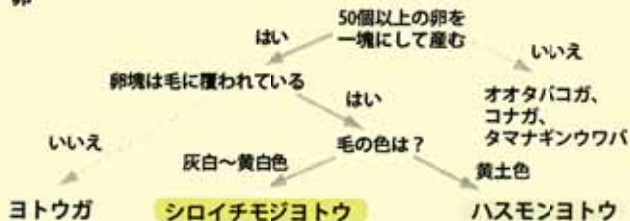
花 卉

中原 英幸

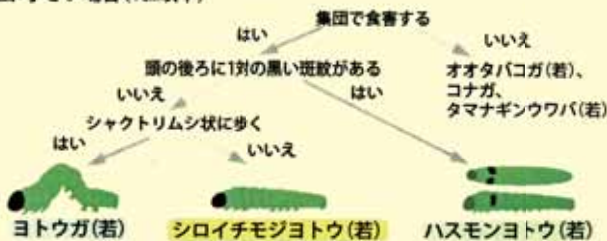
下島営農指導センター
080-1729-1629

畑にはヨトウムシ類の幼虫や、よく似た虫がたくさんいます。下の図をたどっていくとヨトウムシ類を見分けることができます。

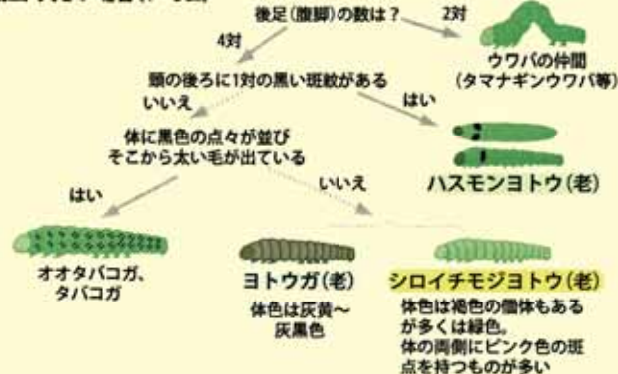
卵



幼虫:小さい場合(1cm以下)



幼虫:大きい場合(1～5cm)



野菜



春インゲン栽培



野 菜

平田 優輝

下島営農指導センター
080-1729-1639

		1	2	3	4	5	6
作型	露地		○	○	○	○	○
	ハウス	○	○	○	○	○	○

*備考・・・○(播種)、□(収穫期間)

品種……………ベストクロープキセラ

本圃の準備……土壌が肥沃で排水・保水性が良く耕土が深い圃場を選定する。

施肥……………肥料は有機質肥料か緩効性肥料を用いる。また、追肥については開花時期から着果時期が最も肥料吸収が大きいため開花前5日頃より行う。

施肥量(kg/10a)

	窒素	リン酸	加里
基 肥	13	20	13
追 肥	10	10	10
合 計	23	30	23

畦立て……………30cm以上の高畦を作り、露地の場合は地温を上げるために黒マルチを使用する。マルチ被覆を行う場合は土壌水分が適湿状態で行う。

播 種……………畦幅1.5～2m、条間40cm、株間35cmとし、1穴当たり2～3粒播き軽く覆土を行う。
発芽までは極力かん水を控え、不足気味であれば敷きわらを植え穴にかぶせやや土を湿らせる程度にかん水を行う。

*立ち枯れ病予防にタチガレン液剤1000倍を灌注する。

間引き……………発芽後本葉2枚が展開した頃に1本に間引きする。間引き後は土寄せを行い株の安定を図る。

灌水……………生育初期は乾燥気味になるためこまめに行い、生育が妨げられないようにする。開花時期頃より土壌水分が不足する場合のみチューブで天候をみながら4～5日おきに灌水する。必ず晴天日の午前中に行う。

温度管理……………昼間温度適温 23～26℃
・夜間温度適温 15～17℃
・地温の適温 22～23℃

誘引・摘葉……………誘引は必ず行い、光線の確保と養分の転流がスムーズに行われるようにする。
混み合う葉や病葉、老化葉は早めに摘葉を行い株の内部に日光を当てる。1度に多くの摘葉を行うと草勢が低下するので注意する。